

建築会会報 第21号

芝浦工業大学

建築会会報 第21号 目次



芝浦工業大学 豊洲キャンパス 完成予想図

地球に緑を取り戻そう 建築会会長 石井敏明

第8回 建築会総会のお知らせ

時代を先取りして夢を託す 教授 三井所清典

3,500名へ 教授 塘直樹

49年間の芝工大生活 教授 清田清司

豊洲キャンパス新校舎について 常務理事 藤沢好一

母校に戻って 助教授 岸田慎司

建築学科の近況 建築学科 林正司

走る！ 林康夫（1977年卒）

道中記 富田和義（1982年卒）

ビジネスとしての建築 原潤（1987年卒）

おまえの職業/美しい街・・・ 山田慎一郎（1992年卒）

現場至上主義 戸田悟史（1997年卒）

近況報告 森田善行（1997年卒）

特別講演会報告 常任幹事 井家常雄・染谷清

編集後記 建築会副会長 松寿章

発行

東京都港区芝浦3-9-14

芝浦工業大学建築会

2005. 10. 01

地球に緑を取り戻そう

建築会会長 石井敏明

芝浦工業大学 建築会会報 第21号

エジプトのピラミッドや王家の墓を緑化しオアシスを蘇らせたならファラオは怒るだろうか？ピラミッドはナイル川の氾濫に耐えられる様に高台に位置し、王家の墓建造には多くの職人家族が暮らしていたと言われている。地球の緑化は緊急を要し建築に携わる者の一人として携わってみたいテーマであり強い興味がある。

地球温暖化が大きな影響を与え始めており工業立国日本の責任が問われております。

京都議定書による炭酸ガス削減義務目標を日本は14%もオーバーしている。炭酸ガス排出権の売買が可能となり多分日本の企業はその権利を高額で買い求めることになると思いますが、投資企業に足元を見られ莫大な金額で買い取らねばならぬ事は明らかです。日本の炭酸ガス排出量を樹木換算すると1年間に1人当り376本に相当し、毎日1本つつ木を植えても足りないこととなります。そこで砂漠の緑化を本格的に産業化してはと考えるわけです。日本には樹木を育てる技術が世界に先駆けてあるそうです。芝工大にも事業に参加できる研究者、人材が豊富にいると思われれます。

九州相当の面積が毎年砂漠化していると言われておりますのでそれに匹敵する面積の緑化が必要なわけです。これができなければ100年後の地球は科学者の推測通りの星となるかも知れません。中国を中心としたアジアの近代化は温暖化を加速する事は間違いない。産学協同が叫ばれてから久しいが大学とOBで出きる事は直ちに行動すべきとおもいます。

さて、建築会は事務局を学外に移して3年目となりますが常任幹事会を定期的開催し活発な意見交換と行動により起動し始めて来ております。何より建築会ホームページの立上げにより若い世代の人達の利用と情報交換が増え、色々なOB会、学生とOBとの交流に役立っております。OBによる学生対象の特別講演会も軌道に乗りはじめ評価されております。建友会との幹事会交流を毎年定期的に行い今年も合同で名簿発行を準備しております。常任幹事も若返りを計っており徐々に世代交代し、より活発化していきますのでご期待下さい。

今年は総会の年であり豊洲新キャンパスの見学から始まり晴海トリトンでの総会・懇親会の開催を予定しております。3年に1度の開催であり懐かしい顔が見られるチャンスでもあり、OBの活動の話伺えるのも楽しみの一つであります。多数の会員皆様の御出席を幹事一同お待ちしております。

(1965年卒 株式会社 総合建築設計)



第8回 建築会総会のお知らせ (新キャンパス見学会、総会、懇親会)

以下の要領で総会・懇親会を行います。今回は豊洲キャンパス落成に当たり新キャンパス見学会を設計監理の担当者(株)日建設計 木村雅一氏(1982年卒)のご案内で実施することになりました。会員の皆様お誘い合わせの上、是非ご出席頂きたくご案内申し上げます。

— 記 —

開催日 平成17年11月19日(土)
受付場所 芝浦工大豊洲キャンパス
東京都江東区豊洲3-1-35
東京メトロ有楽町線「豊洲」駅下車
徒歩10分
受付時間 12:00～13:00
見学会 13:00～14:30

総会会場に移動
見学会終了後総会会場に移動(徒歩12分位)

総会 15:00～15:30
総会会場 「晴海 バサラ」(日本料理)
東京都中央区晴海1-8-16
晴海トリトン3階
TEL 03-5144-8282

懇親会 16:00～18:00 (総会と同会場)

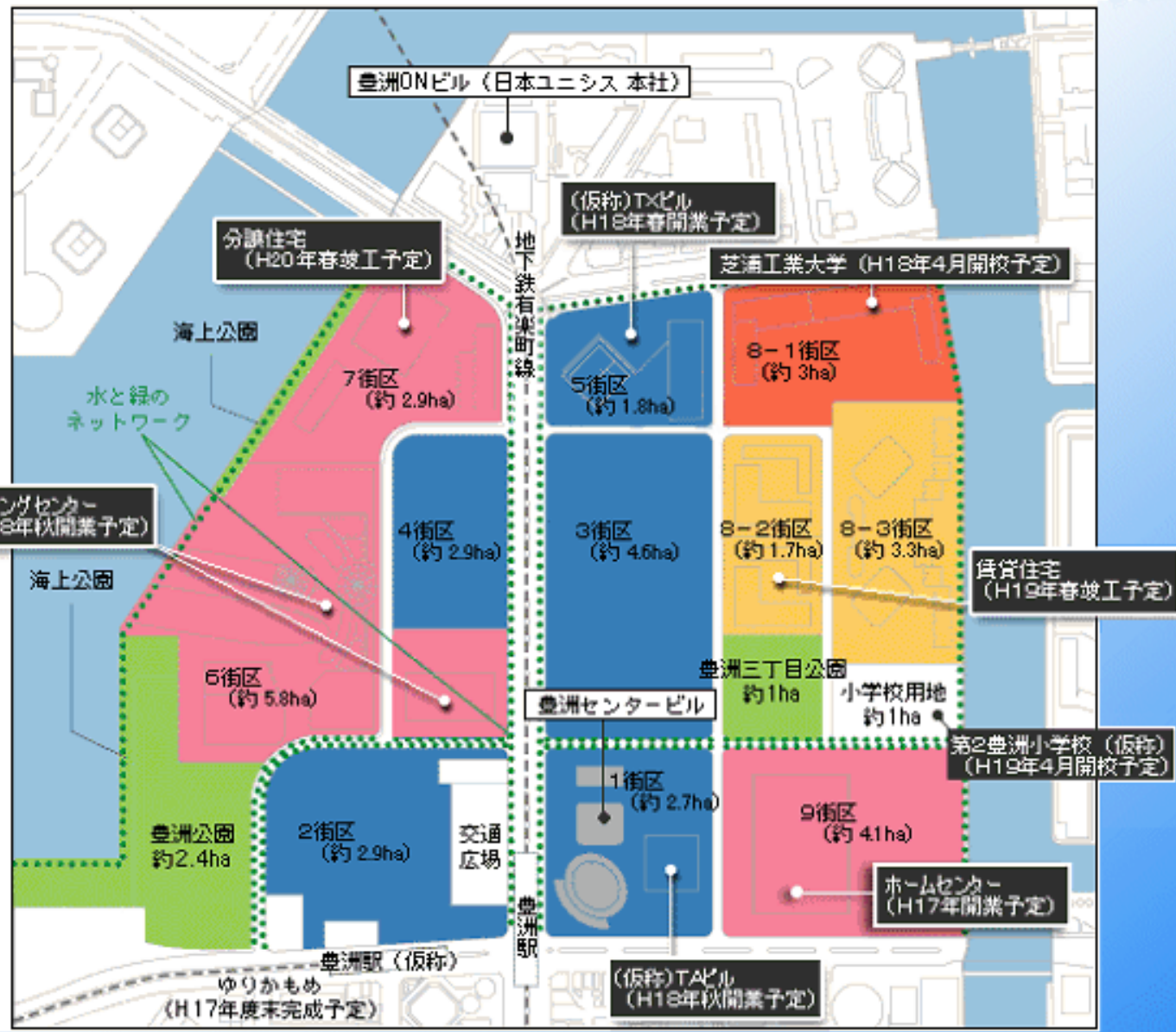
総会・懇親会 会費 8,000円
(当日 見学会受付にてお支払いください)

連絡先：建築会学外事務局
(株)ライトプランニング内
東京都渋谷区恵比寿西2-3-11
TEL 03-3464-5716 FAX 03-3464-0824
Email master@sit-arch.com

連絡先：建築会学内事務局
芝浦工業大学建築学科
建築学科主任 毛井正典

出席連絡ハガキは10月15日までにお出してください。
尚、出席予約は建築会ホームページでも受け付けて
おります。(<http://sit-arch.com>)

豊洲キャンパス周辺街区計画図



芝浦工業大学
建築学会報
 第21号

発行
 東京都港区芝浦3-9-14
 芝浦工業大学建築会

時代を先取して夢を託す

教授 三井所 清典

昭和43年、大学院を終えたばかりの若い講師として、私の教師生活はスタートしました。風体も気分も学生のみであり、いつも学生の中に紛れていたように思います。研究室でゼミの三年生の『先公まだ来ていない?』という声に『オイ!居るぞ』と応えることに特に違和感を覚えていませんでした。学生たちが蜂起した時は私もバリケードの中にいたいという気分がなかなか消えませんでした。

数年経ったある日、渋谷の雑踏の中をブラブラ歩いている時、背後から『先生!』と呼ばれ、まさかと思いながら振り返った時は、心臓が停まる思いでした。どこに居ても私は教師だと改めて認識しました。それは現役の学生に対するだけでなく、毎年増えていく卒業生に対しても、社会人として成長していく多くの卒業生に対してもいつまでも教師であるという立場の認識であり、自分もそうありたいと願う覚悟でもありました。

教師は夢を描くものであり、その夢はもの造りとしていつも10年から15年位、時代を先取りし、学生と共有することです。

当初は、建築を考えたり、造ったりする技術は謂わば慣習に基づく「建築術」であり、これを科学に基づく「建築学」にしなければいけないという夢でした。それがビルディングエレメント論による性能論とコスト論であり、その実現の手段は建築の工業化・部品化でありました。次は建築をシステムと捉えることで総合性の高い環境体である建築を解く「鍵」であると思うようになって伝統構法も対象化できるようになりました。多様な個人の要求に応えること、個人を超えて地域という概念での創造、さらに持続可能な社会造りでの建築の役割、と夢は次々と新しくなってきました。環境共生の夢は既に15年描き続けています。

最後になりましたが、芝浦工業大学で多くの若者に出会い、夢を託し続けてこられたことの謝意を建築会の皆様に申しあげ、残余の期間を勤めたいと思います。



3,500名へ 教授 塘直樹

「この国の国家ビジョンについて語る」とあったので外国人の集まりかと思ったら、れっきとした日本人の集まりでした。日本人が日本国のことを「我が国」ではなく「この国」とか「あの国」と呼ぶ風潮があることは承知していましたが、違和感もありました。そう言えば、国語学会は日本語学会に名称変更しなければ世間で通用しない、という論争もありました。国際性や客観性を強調してのことだったと記憶しています。学内でも「この大学のカリキュラムは・・・」「あの大学の教員は・・・」などを耳にすることがあり、てっきり通り掛かった他大学の学生かと思ったら本学の在學生でした。学生の大学への帰属意識が希薄になったというより、身近な家庭や学校や社会などを含め、日本人社会のあらゆる面で個人の組織への意識が根本的に変質してきたと実感し納得した次第です。先の総選挙中、党や県連や派閥や支持団体や有権者などの間でいわゆる「ねじれ現象」に苦しんだ候補者がいたのも頷けます。

昭和48年以来35年間努めた芝浦工業大学をこの春定年退職しますが、この間、常に悩まされたのが、私自身の大学への帰属意識でした。教職員組合の執行委員長を務めたり教授会委員会の委員長を務めたり学科主任やクラス担任や就職担当を努めたりはしましたが、いずれも中途半端でとても貢献したなどとは思えないからです。傍目には、得体の知れない教員と写ったはずですが。建築学科の教員としても、毎年100人以上の新入生を迎え、講義や演習や卒論指導を行い、35年間で3500人以上の卒業生を建築会に送り込んだこととなりますが、在学中のそのときそのときだけが夢中で、今現在顔と名前が一致するのはわずかです。卒業後に再会して初対面と間違えた失礼もありました。

さて、今後は専ら建築会の席でお目に掛かることとなりますが、お互い建築学科を語る時、せめて「この学科」や「あの学科」だけは止めようと思っています。



49年間の芝工大生活 教授 清田 清司

芝浦工業大学 建築会会報 第21号

芝浦工業大学

建築学科第4期生として1957年4月入学以来、来年3月定年退職に至る間、建築会の皆さんをはじめとして本学に関係する方々には大変お世話になりました。入学当時、本館以外は木造平屋建て校舎で、大変な大学に進学したと後悔もしました。2年生時に北校舎、3年生時、東校舎が相次いで着工・落成した。卒業年に南校舎が落成しました。退職年に田町校舎は豊洲校舎に移転します。まさに、田町（北東南RC造）校舎と私の学園人生とが丁度重ります。

私が学生時代より今日まで無事勤めをまっとう出来たのも、三大恩師にめぐり合えたことです。当時非常勤教授梅村魁先生（東大教授、1978年より本学専任教授）と同・鈴木悦郎先生（大成建設専務・現在も構造計画の研究や輪講会でお世話になっています）および専任教授浜田大蔵先生方には筆舌に表せないご指導を受けました。また、三恩師を取り巻く方々にもこの紙面を借りてお礼申し上げます。

建築会の創設は1967年三浦元秀先生の古希祝いを機に、専任教員の浜田・嶺岸・石川・渡辺先生等の働きによって、会長・岩井隆氏（工専1回）以下、副会長・会計監査・会計・各クラス幹事によって立ちあげることができました。三浦先生からは、建築会と建築学科教室に多額のご寄付をいただきました。この資金を学科教室は三浦賞（卒業研究最優秀設計賞：メダル）にあて、建築会は建築会賞（成績最優秀賞：盾）及び、運転資金にあてています。設立1年後（1968）より民主化闘争と称する全国的な学園紛争に巻き込まれ、メダルや盾の雛形の出来たところで1名の表彰者もなく中断しました。その後、1979年に両賞が復活し、卒業式に岩井会長にもご出席いただいて建築会賞を授与していただきました。当時、これが建築会の唯一の活動（？）でした。1984年の建築学科創設30周年を機会にし、記念行事と合わせて、建築会総会（役員・幹事会確立）を11月17日に建築学会会館で開きました。翌年6月建築会会報創刊号を発刊その後、毎年号を重ねてきました。

皆様のご協力により、建築会が益々発展することを期待します。

（1961年卒 芝浦工業大学 工学部 建築学科教授）



豊洲キャンパス新校舎について-1

常務理事（施設担当） 藤沢 好一

新校舎の建設は来年4月の開校を目指して、最終段階に入っております。今年の1月27日の上棟式以降、内外装および設備工事が急ピッチで進み、建物は外構も含めてこの9月30日に完成引渡しを受けます。10月からはIT関連工事、地域冷暖房の受入れ工事、実験装置や家具・什器の搬入と設置工事を行い、年明けから芝浦校舎からの全面的な移転(大宮校舎からは一部)が入試日程をにらみながら短期間で行なわれます。

キャンパスが立地する豊洲2・3丁目エリアでは、臨海エリア最大の民間開発事業が展開され、新しい都市型産業の拠点となる街づくりが急ピッチで進められています。東京メトロ・有楽町線「豊洲」の北側に広がる約50ha(石川島播磨重工の造船所跡地)の一面に新キャンパスはあります。来年4月のこの新しい街開きの先陣を切るのが本学の開校です。一足早く、通学路となる区道が完成し、この4月1日から利用されています。

建物ならびに工事概要は次のとおりです。

- 敷地:約3万㎡、建物延床面積:約6万㎡、地下1階(一部)、地上14階建て、免震構造による鋼構造
- プロジェクト総額 約366億円(内訳、土地:約88億円、建築費:約165億円、設備・機器・外構・設計費等:約100億円、移転費等:約13億円)
- 設計監理: (株)日建設計・(株)エヌ・ティ・ティファシリティーズ設計
- 施工:(建築工事) I工区-大成建設(株)、II工区-三井住友建設(株)・(株)大林組、III工区-戸田建設(株)・飛島建設(株)

豊洲キャンパス新校舎について-2

常務理事（施設担当） 藤沢 好一

新校舎の特徴として、主な点を挙げておきましょう。新しい都市型理工系大学ということで、周辺の産業・商業・居住の機能と連携できるオープンづくりをめざしました。敷地に囲いがなく、24時間出入り自由で、学内のコンビニ、レストラン、図書館などは地域にも開放される予定です。当然ですが、ITを駆使し、セキュリティ・システムの構築には配慮されています。免震構造を採用し、構造壁から開放されたフレキシブルな空間を実現し、将来にわたって教育・研究的の利用に自在な対応ができるようになっていきます。また、学生同士、学生と教職員の交流のためのスペースを多く確保しています。教室棟では学生の教室等への移動用として、1階から8階まで昇降2本のエスカレータを装備し、他にエレベータだけでも11基が設置されます。床面積は芝浦校舎の2倍を超えますが、広くて新しいリッチな校舎というだけではなく、新しい拠点にふさわしい教育研究の場とすべく教職員一同、決意も新たに移転作業の準備に取り組んでいます。

来年4月から、この新校舎では工学部11学科の3・4年生、大学院修士・博士の学生、合わせて約3千人が修学することになります。

また、豊洲キャンパスの開学を待って、芝浦校舎は解体される予定ですが、その後も本学の大学機能を継承させる方向で利活用事業を進めております。あわせて開設から40年になる大宮キャンパスについては、将来を見据えた基本的な整備計画をとりまとめたところです。校友の諸姉諸兄に置かれましては、母校のますますの発展のために引き続きご理解ご協力をお願い申し上げ、新校舎の建設状況のご報告とさせていただきます。

なお、詳しくは次のホームページをご参照ください。

豊洲二・三丁目地区開発協議会 <http://www.toyosu.org/>

大学ホームページ豊洲計画 <http://www.shibaura-it.ac.jp/kouhou/toyosu/index.htm>

豊洲キャンパス新校舎について-3

常務理事（施設担当） 藤沢 好一



新校舎完成予想図(鳥瞰図)

豊洲駅からの通学路(区道)から
完成間近の新校舎を見る



母校に戻って・・・ 助教授 岸田慎司

最近の建物ではバリアフリーが進んでいる。しかし、バリアフリーとはそうした年齢、身体、生理、感覚だけの問題ではない。異業種のバリアもフリーにすることであろうと考えている。哲学、経済、スポーツ、芸術等のそれぞれに生きる人たちと接触し、それぞれの専門家と同じくらいの評論をたたかわせるくらいの潜在能力を持つ建築家を育てていきたいと考える。そうすることによって私自身の力量も伸びると思う。しかし、学生と接してきて思うことは、受身の学生がいかにか多いかということである。確かに優秀で、潜在能力もあると思うが、言われるまで動かない、言われたことしかできない、一を聞いて十を行える学生はほとんどいなかった。確かに学ぼうという意識は強く看取される。しかし、創造しようとする意識はうすい。そういう学生に対しての教育方法が今後問題になると考える。大学が一方的に学生に対して教育（授業）を行うという発想を止めて、学生個人と教育する先生側との相互作用を大切にすること。つまり、学生自身に、大学での勉強の目的意識を認識させ、そして大学の先生自身が学生との相互作用のために自分の時間を割くことが重要であると考えている。

現在は、専門書が充実しており、またインターネット等で調べようと思えば簡単に調べられる。つまり一人で勉強しようと思えば可能な時代である。それでは、大学における「教える」とは何か？高度な技術を教えることか？最先端の技術を教えることなのか？答えは否である。高度な技術や最先端の技術には必ず「基礎」がある。大学における研究はこの「基礎的研究」を大事にしていくことが必要であると考えている。学生には大いに基礎研究の重要性を植え付け、それを元にステップアップできる環境を作っていきたいと考えている。

私は、大学教育は「人づくり」だとも考える。「人学ばざれば道知らず。玉磨かざれば器をなさず。磨けば光る。磨かざれば錆び付く。」 こうした格言はすべて教育現場から発生し、しかもあらゆる分野の基礎学問の中に展開されたものである。

建築学科に学んだ学生が他の分野へも大きな影響を持つ人間に成長することこそ基礎研究の使命かとも考えている。

(1994年卒 芝浦工大工学部建築学科 助教授)



走る！ 林 康夫

小柳津先生をはじめとする諸先生に教わり、辻垣さんにお世話になりました。皆さんお元気ですか。日頃のご無沙汰をお許してください。東京を離れて25年秋田で工務店を兄と一緒にやっております。

35歳頃はタバコを毎日60本吸っていて、健康診断で血圧が高いと言われ、38歳で血圧が高いのはタバコの所為だろうと休煙を始めました。食べ物の味がわかるようになった所為か、食欲が増し、体重も身長165cmに対して63kgから73kgまで太りました。

40歳では、高脂血症の指摘を受けました。46歳で、心筋梗塞の疑いありという事で、精密検査をし、いつ発作を起こしてもおかしくないと言われました。幸い、心筋梗塞ではありませんでしたが、心電図の波の異常はそのままでした。

医師に、軽く運動をし、少し痩せなさい、お酒を飲むなら、二合以内と言われました。当然仕事で飲む機会は、ほぼ毎日という頃でした。何とかお酒の量を減らし、ジョギングを始めました。始めてみたら、気分がいいのと、多少食べ過ぎても、体重が安定しました。

そのうち、現場の同僚から、市民マラソン大会に誘われ、10kmレースから始めたところレースの楽しさに目覚め、次は20kmそしてフルマラソンを走りました。初フルは4時間13分でなんとか完走。

今では年に10レースほどの参加をしています。1月仙台、2月東京青梅、3月京都、4月山形県温海、5月岩手県錦秋湖、8月県内若美町、9月田沢湖、10月県内の二ツ井と五城目、そして仲間たちとの駅伝への参加と1年中忙しく走っております。

55歳までは自己ベストタイムを目指し、フルマラソン2時間台での完走を目標に、その後は本当にゆっくり楽しく生涯の趣味にしたいと思えます。皆さんも、現場や事務所で仕事以外に楽しい運動をしてみたいはいかがでしょうか。お酒も食事も今以上においしくなり、ストレスも少なくなるかと思えます。まずはパソコンを置いて、散歩を！そして、ウォーキングを！

(1977年卒 株式会社 林工務店)



道中記 富田 和義

47歳になった。20代の頃建物の細部スケッチにとりつかれたように手を動かし毎日の帰宅が終電だった。建築のしくみがわからず単純な決定をくださのに今の何倍も時間を要したもどかしくもあったが小さい子供が一日虫を追いかけて飽かぬように未知の世界を知る喜びに満ちていた。47歳の今、仕事の全体が見えそして細部も見える。フランス人建築家のもと海外のプロジェクトを含め住宅であっても500㎡を超えるような大きな仕事がメインである。だが終電で帰宅することは追い込み間近でも無い限りほとんどない。若い頃の仕事を思い返すと懐かしくほろ苦い気持ちになる。一方で、人生は年齢を重ねるごとにやはり豊かさを増していくのだと感じることも多い。

ありふれた日常のことをとって、以前は通勤電車でただ住まいと職場を往復するだけだったが、今では往復20キロをスポーツ自転車で通い季節の変化を風で感じる。茶道をかじったのがきっかけで和服を着る楽しみを知り、しじら織の唐棧を浴衣代わりに街に出てみる。遠のいていた趣味の写真も、来年グループ展への参加が決まりこれから本格的に準備が始まる。友人知人との交流も奥行きが出て来たように思う。初めて勤めた事務所の30周年に際して今100人近い懐かしい人々が集っての会を計画中であり打ち合わせと称してはOBや事務所主宰の建築家夫妻と互いの家を行き来し食事を共にし語り合う。

また、妻と共同で手がけている仕事では、80歳にして新築を決意した老夫婦の住宅や働き盛りの若い夫婦の究極のローコスト住宅までさまざまな家族の生活の器を設計する。建築工事としては小さな仕事だが「ある家族のこの先数10年の生活を請け負う」住宅の設計は、若い頃にはけして分かり得ないさまざまな要素に満ちていて、難しくもやりがいがある。大きなプロジェクトと比べて簡単であると感じることは微塵もない。年齢相応に時には人生の刹那を感じる出来事にも遭遇するが、今まだ知らないことがたくさんあり今まだ成長している自分がいる。

建築とは人生とはやっかいであるがおもしろいものである。

(1982年卒 S. INTERNATIONAL ARCHITECTS)



ビジネスとしての建築 原潤

1987年卒 原潤 と申します。小柳津先生お身体の具合は如何ですか？私と学校との繋がりと言ったら先生や旧友たちとの賀状のやり取りくらいでしたので、6月のある夜、この原稿の依頼を告げる一本の電話が、走りつづけてきた時間を一寸振り返るきっかけになり、今こうして書いています。

卒業以来一貫して建築に関わる仕事に携わってきましたが、最近経験した出来事についてお話ししたいと思います。この8月に自分が担当した建物を外資系の不動産ファンドに初めて卸しました。そのとき感じたのは、『使い手の見えない建物をいつも以上に仕上げよう』と思う設計者としての良心と、これを買ったファンドの行く末に対する不安でした。現在都心では、ファンドの存在を背景とした“ミニバブル”というべき地下の上昇が実感されます。ニュースで報じられているような上昇に転じたという次元のものではなくて、限られた土地を手に入れるための競争は正に激烈です。チャンスを伺うデベロッパーは、出口が約束されている安心感から土地を買い、内外の不動産ファンドはその潤沢な資金をつぎ込むための物件探しに奔走している状況です。ファンドから見れば、建物は物件であり、ひとつの金融商品でしかありません。そこには、建築物に芸術性はおろか愛着さえも存在しない、投資対象としての価値しか認めない現実があります。それを相手に設計者は、材料を選び、納まりを検討し、何度も何度も検査を繰り返して、納得いくものづくりをしていくため、モチベーションを高めていかななくてはなりません。住宅建築では、クライアントや購入者と立場は違っても、その人のことを考えながら創っていくところがあると思います。しかし、今度の経験で感じたことは、見えない施主に対する自分の価値感のプレゼンといった思いでした。つまり設計者（技術者）としての良心をなくしてはいけないという気持ちです。

そしてファンドのこと、今のファンドの構造ではバブル崩壊後の、10年以上に渡るものと同じ痛みは受けないとは思われますが、上場資金や企業年金などファンドに投資された資金は膨大であり、特に個人投資家の行く末を安堵したいと思います。日本は、何でも一極に集中し過ぎるのではないのでしょうか。マンションブームだということそればかり造り、都心のタワー型といったら・・・、そしてファンドといったら・・・という具合に同じ方向に振れて行きます。近頃雑誌で、地域建築とか、リノベーションとか、手軽なところではリフォームとか切り口を変えた取り上げ方がされています。日本も成熟社会を迎え、全てが新築ということではないと思いますし、こうした流れの定着が望まれます。私が今の会社を選んだのも、『東京ならではのこと』をやりたかったからでした。今回の建物売却に際して、ファンドの方がこの建物はどうしてもほしいと言ってくれました。ビジネスとしての建築の中で、数字ではない『何か』が伝わったのであれば本当にうれしいことです。社会構造、価値観の変化は益々早くなると思います。また、『新しい何か』を探し出したいと思います。皆様のご活躍をお祈りします。

最後に、我々の同期のトピックスを、同期の山崎君は同じ熊谷組に進み、日本最高高さである『ランドマークタワー』の施工を経験した後、現在世界最高高さを誇る『台湾の台北101』の施工にも携わりました。日本と世界の最高を両方経験している人が身近にいるのですよ。この紙面を通して、新しいコミュニケーションが広がれば幸いです。
(1987年卒 株熊谷組設計部を経て 株グローバルエンタープライズ)

発行
東京都港区芝浦3-9-14
芝浦工業大学建築会



芝浦工業大学 建築学会 会報 第21号

発行
東京都港区芝浦3-9-14
芝浦工業大学建築会



おまえの職業／美しい街は天才を 山田慎一郎

「おまえの職業はなんだ？」「建築の設計だよ」「具体的には何をやるわけ？」「難しいな。たとえばこの壁の高さを決めたり。この家具なんかもデザインしたり色々だな」「じゃこの家具はおまえがつくったのか」「ん、モノ自体は職人につくってもらってる」「じゃおまえは何もしてないじゃない」。個人的に改装の仕事をした店での高校時代の友人とのやりとりである。どうにか10年以上同じ設計事務所に勤務し、しばしば都合の良い「先生」で呼ばれる。いったい我々の職業名はなんだろう。よく「建築家」という不思議な呼び方がされるがはたしてどのくらいの人が認識してくれるのか。だいたい政治家じゃあるまいし自ら名乗る言葉でもないでしょ。好例「指揮者」は文字通り指揮をするひとであり、イメージするところ交響楽団の前でタクトを操る。「ご職業は？」「指揮者です」「えっ？オーケストラの！！」。建築家は建築をする？ひとではないし、建築士も職業より資格。建築設計者なのか、建築デザイナーなのか。クライアントと直接打ち合わせをして他の建築関係者と協働し、屁理屈合法的な建モノの、おもに意匠上の機能について最も注視し、自身は統括者だと思っている業界人なのか。幸いにして名刺には「建築家」という肩書きはついていない。学生時代、なにも知らずに憧れた「建築家」。働くようになって「建築家？」。くだらないことかもしれませんが何か良い呼び名はないですかね？

さて本当にくだらない話。もしドラえもんにお願いするとしたら「よそでポイ捨てしたゴミが自分の部屋に捨てられてしまう光線」かな。デザインは好き嫌いで済むけれど、街がゴミで汚いのは悲しい。かつてインドの数学者が難しい理論をごく簡単な数式で次々に表し、その数式が現在の科学に応用されているという話を聞いた。本人も過程は説明出来なかったがその式を導き出した。疑問に思った日本の学者は彼の育った街を訪れてその理由がわかった。「貧しい生活ではあったが昔からの遺跡が残る大変美しいところだった。その美しさが彼に美しい数式を与えたのだ」。美しい街は天才を創る、と思いたい。

(1992年卒 (株) 横河設計工房)

現場至上主義 戸田 悟史

まず初めに、自己紹介を簡単にさせていただきます。学部では石川研究室に在籍し、卒業設計をご指導いただきました。

学部卒業後は大学院に進み、建築学科を離れ、建築工学科の三宅先生に師事しました。大学院時代には、建築学科CAD室のTA（ティーチングアシスタント）に従事し、建築学科とは大学院在学期間中も、なにかと御世話になっておりました。

大学院を卒業後「大田純穂建築設計研究所」に入所し、現在までの7年間勤務しています。事務所は所員4人と、決して大きな事務所ではありませんが、業務として平成3年より千葉県にある新設大学(平成17年現在、敷地面積13万平方メートル、延床面積6800平方メートル)の設計を継続的に行っており、入所してすぐに、設計、そして約1年間の現場常駐監理を経験でき、卒業したての右も左も何もわからない現場での体験が、今になれば非常によいものであったと思います。

その後も、築200年の民家の現地再生工事、こちらは現代の建築技術とは打って変わり日本建築の技術の素晴らしさを体感でき、また二年の設計期間を経て再び大学の薬学部施設の設計監理、こちらは放射線、クリーンルームなどの施設に携わってきました。

いずれも一風変わった施設設計に関わることができ、ここでも、ものづくりの喜びを享受しています。

また、現在、再び大学施設設計監理に携わっており、おりしも、母校の豊洲新キャンパスの工事も進んでおり、私物件と比較しながら、進捗状況など拝見しております。

おわりに、本年6月に学年幹事を任命され、その縁かとは思いますが、学会報の投稿を依頼されました。近況報告をとということであり、筆を取らせていただきました。今後とも微力ながら貢献できればと思っております。皆様には以前にもまして、ご縁があるかもしれません。そんな折には、どうぞ宜しくお願い致します。

(1997年卒 大田純穂建築設計研究所)



近況報告 森田善行

はじめまして。の方が殆どなので簡単に自己紹介をさせていただき、近況報告を書かせていただきます。

97年建築学科卒業の森田といいます。卒業後はゼネコンに就職。現場マンをしています。最初の赴任地は九州でした。千葉育ちの私には縁もゆかりもない土地で社会人生活がスタートしました。最初は、職人さんたちの方言がきつくて聞き返したりしてましたが、5年間の九州暮らしですっかり慣れて、九州出身者と間違われるほどに溶け込むことが出来、仕事もプライベートも充実した時間を過ごすことが出来ました。

赴任して最初の現場で「現場の主役は職人さん。われわれは、主役じゃないよ。職人さん（主役）が働きやすいようにサポートするのが仕事だよ。」と言われたことを都内で働いている現在も時々思い起こしたりしています。

本当に職人さん在っての建設現場。痛感していますが、ここ数年、職人さんの高齢化や人員不足などに加え短工期、実際に造っている方々の状況が厳しくなっているのを感じています。もう少し時間がほしい。ここ何現場かはそう思う現場が続いています。世の中の流れからいってこの傾向は続いてくでしょうが、このままだとこの先若い人たちにとって魅力ある業界にはなりえないと思います。工業化が多少進んできてますがやはり人が作り建設現場。このままでは10年20年後が心配です。

ただ、竣工し実際に建物ができ形となり動き出すとき、それまでの苦勞が報われる。それが楽しくてやめられく現在までに至っています。

現在の仕事は、芝浦ではなく他大学の校舎の建築現場にいます。学生が多くいる中での作業は何かと気を使いますが、来年の4月に向け日夜、現場に事務所に動き回っています。学生たちの姿を見ると羨ましくも見えますが、自分も学生時代はあの学生たちと同じだったよな。などと思いながら働いています。

最後に仕事以外の近況報告はというと、今現在、双子の親父として「育児は育自」をモットーに夫婦共々頑張っています。

(1997年卒 清水建設 株式会社)



建築学科の近況-1

建築学科 林 正司

芝浦工業大学 建築学会 会報 第21号

前号でもお知らせ致しましたが、今工学部全体で、定年退職に伴う教員の入れ替わりが急速に行われております。建築学科でも、今年3月の山本先生のご退職に続き、今年度限り（来年3月）で、三井所、清田、塘の3先生が退かれます。一方、昨年9月より堀越（設計）、また今年4月より南（計画）、岸田（構造）の3先生を新たに迎え、さらに電気設備学科の廃止に伴い、同学科の西村先生が4月より本学科に移籍されました。

新キャンパスへの移転もあり、新しい血が入り、学科をどのように変えてゆくかについて、若手を中心に現在忌憚のない意見を戦わせているところです。進化をご期待ください。

建築会のご支援を得た学科の行事があり、それを交えて学科の近況をご報告致します。

デザインチャンピオンシップ2005

学科主催のデザインチャンピオンシップも今年は4回目を迎え、毎年今話題の方をゲスト審査員としてお願いしていますが、今年は山本理顕氏をお迎え致します。山本氏の出された今年の課題は「都市ミュージアム」です。このコンペは芝浦工大の在籍者なら誰でも参加でき、建築学科に限らず、また学年を超えて参加があり、昨年は1年生が佳作に選ばれました。11月1日に田町校舎にて公開審査を行い、最優秀者には建築会より提供して頂いた資金で（豪華）賞品が渡されます。また応募作品は5日までの芝浦祭で展示される予定です。在学生の力作を是非ご覧ください。

2004年度建築学科学位授与式

今年も新たに建築学科より97名が巣立ってゆきました。3月18日に大学全体の卒業式の後、都内のホテルにて学科の学位授与式、および成績優秀者の表彰などが行われました。毎年建築会より、学業成績の最優秀者には建築会賞が送られていますが、今年は野口浩太君が受賞しました。また卒業設計最優秀賞である三浦賞には、鷹箸譲君の「囃子-雑木林に在るもの」が選ばれました。

建築学科の近況-2

建築学科 林 正司

芝浦工業大学
建築学会
報
第21号

先輩による職業講座と就職状況

今年より、建築会のご協力により、在学生が進路を考える一助とすることを目的に、在学生に向けて各種職についている先輩方に講演して頂き、各現場の様子を学生に直接伝えていただく機会を設けました。講演者の人選はほとんど建築会にお任せしており、既に今年度も2回、公務員、施工、設計事務所、ハウスメーカーの方々の話を伺いました。学生にとっては非常に良い刺激となっているようです。

建築学科の就職状況は、近年施工業種の求人は増え続けていますが、学生の希望者は少なく、大手企業を含め毎年求人数を満たすことができません。また、実力や設計課題の実績には関係なく設計方面への希望者は相変わらず多く、学生の希望を満たすことができません。他学科の教員より指摘され気がついたことですが、最近は他の学科では専門とは関係なく情報関係へ就職する率が高いのですが、建築学科では極少数であり、要するに「就きたい仕事でなきゃダメ」であり、これらの状況より表面的には就職率は工学部中最も低い学科の一つとなっています。

また、大学院への進学も、現時点では他大学への進学も含め順調に決まっているようです。

新しいキャンパスへの移転を間近に控え、新旧学科構成員一同皆様のご期待に応えるべくたゆまず変革を推し進めていく所存です。一層のご理解とご支援をお願い申し上げます。

建築学科特別講演会報告

特別講演会担当 常任幹事
井家常雄・染谷清

昨年より建築学科主催のもと、我々建築会も協力し、現役学生を対象に就職活動の手助けの一環として卒業生による特別講演会を開催しております。昨年に引き続き、今年も4月、5月と2回行い、10月より来年1月迄毎月開催する予定で、建築学科の唐澤先生方と打ち合わせを行っています。各回とも三名程のOBの方々に実社会での経験談を、働くことの楽しさ、苦しさ、喜び等をお話いただいています。

去る4月22日に、行政関係者として富山県庁建築住宅課の川崎政善氏(1970年卒)、総合建設業者には奥村組の土屋平八氏(1970年卒)、助手の鈴木真吾氏(1994年卒)、インテリア設計者には乃村工藝社の加藤利仁氏(2000年卒)の各氏に講演をしていただきました。川崎氏には雪国の特性を活かした住宅の研究開発を行い、公営住宅を建設した事等。土屋氏、鈴木氏には大規模寺院建築の施工に従事した折の苦労話や、日を追って完成していくことの面白さ、感動をお話いただきました。加藤氏には若いながらいろいろなコンペに参加したこと、又設計した店舗等の施工に当り工事監理に従事し、現場の職人さんとの打合せ等の苦労話を講演していただきました。

また、5月27日には、行政関係者として川崎市役所建築課の加藤忠正氏(1978年卒)、地方総合建設業者には勝村建設の神戸伸一氏(1986年卒)、助手の岩寄康明氏(2002年卒)、ハウスメーカーには積水ハウスの仲野成彦氏(1988年卒)の各氏に講演をしていただきました。加藤氏には小江戸としての川越市の街並み保存と地域の再開発との調和と協調、川越市の特性を活かした街作りの苦労と生き甲斐をお話いただきました。神戸氏、岩崎氏には施工業者として設計した建物が予算、工程等を考慮して職方との打合せ、管理をとおして建物が竣工した時の感動。仲野氏にはハウスメーカーで個々の住宅の設計及び監理、又一个の街区の設計、街並みの設計等の話しをしていただきました。講演していただいた各氏は、充実した仕事をなさっていて、特に若い人は夜遅くまで頑張っている様子で頼もしく思います。

特別講演会に参加した学生達のアンケート調査でも大いに参考になっている事が分かりました。社会のいろいろな分野で大活躍している諸先輩の話しを聞いて、自分達の夢を活かす為の働く場が、どのような会社に就職すれば活かせるか少しずつ解かってきたと思います。せっかく大学で4年6年と専門の知識を吸収し研究してきた事を、ライフワークとして実社会で活かさないのは「もったいない」ことです。

講演をしていただいた各氏には大変感謝しております。お忙しい中、後輩の為に本当に有り難うございました。これからも諸先輩方には、母校の後輩の為に講演の依頼をお願いいたしたいと思っております。その折には快くお引き受け下さい。

(井家常雄：1968年卒 株式会社 サンメイエンジニアリング)

(染谷清：1969年卒 有限会社 K A I プランナー)

2006年度会費納入のお願い

会費納入比率は昨年度までと比較し少々改善されてきておりますが、まだまだ低調です。毎年、卒業生の増加に伴い発送費も必然的に増えます。更に本年は名簿発行に大きな予算が必要になります。前回の名簿発行時から名簿用別料金を廃止しており、新しい名簿は会費納入者全員に発送されます。

ぜひ皆様のご理解とご協力をお願い致します。同封の郵便振替用紙でご送金ください。今回から会員番号を設け、封筒の「タックシール」に記述してあります。郵便振替用紙の会員番号欄にご記入してください。住所や勤務先などに変更があった方は通信欄にその旨記入してください。名簿のデータを更新します。

個人情報保護法が施行されました。建築会においても、名簿に氏名以外の情報掲載を拒否したい方に対して対処致します。ご希望の方は通信欄にその旨ご記入ください。

年会費 2,000円

建築会・建友会名簿の発行準備を進めています。今回、建築会の学年幹事の方々を改めて指名させていただき、名簿の整備にご協力いただいております。2005年12月中にはお手元に届くよう作業を進めています。

名簿に広告を掲載していただける事業所を募集しています。広告に対するお問い合わせは、下記アドレスにメールをお願いします。

E-mail: master@sit-arch.com

編集後記

建築会副会長 松寿 章

芝浦工業大学 建築会会報 第21号

芝浦工大がいま大きな変革の時期にあることを実感する記事が続いています。豊洲キャンパスの来年4月開校にむけて校舎は完成し移転の準備が整うなか、長くお世話になった三井所先生・清田先生・塘先生の3人の先生が来年3月に退官されます。すでに新任で昨年からは堀越先生、今年4月から南先生・西村先生そして寄稿をお願いした岸田先生の4人の先生がたが着任されています。建築会も特別講演会やイベントへの参画など建築学科との新しい関係を求めて少しずつですが活動をしています。若い常任幹事の仲間を加えて活気があふれて来ました。学生や大学院生の側からも卒業設計展などのイベントを通して、建築学科と建築工学科とシステム工学部環境システム学科との横断的な連携も始められています。

大きな変革を遂げつつある大学の姿はようやく景気が回復してきたとはいえ、日々に追われる私達に勇気を与えてくれます。建築会の活動も含め、大学の今後にますますの関心と注目をお願いします。

この会報は建築会総会と豊洲新キャンパス見学会・懇親会の連絡を兼ねる時期を選んで発送することになり、先生方やOBの方々への原稿依頼のスケジュールの余裕がないなか、こころよく原稿をまとめていただいたことに感謝しています。いろいろと不手際や至らないところが多かったと思いますがどうかご容赦をお願いします。

(1978年卒 松寿設計コンサルティング)

ps. 建築会サイト管理者より

デジタルデータによる当会報は、印刷物として会員諸氏に送付された「建築会会報 21号」の複製です。建築会サイト上での会報を検討しようとする一環として、今回PDF版を作成した次第です。

建築会のサイト管理者として、印刷物としての会報とは異なる情報発信ができないものかと考えています。会員各位からのご意見をお寄せください。

サイト管理者 阿部泰資 (1967年卒 株式会社 ライトプランニング)

芝浦工業大学 建築会 URL <http://sit-arch.com/>

発行
東京都港区芝浦3-9-14
芝浦工業大学建築会